



国連創設 80年

「人類は団結したとき最も強くなる。」
——立場を超えて人々をつなぐ国連の役割

国連の過去・現在・未来とは——。

国連広報センター(UNIC)所長

根本かおる



ねもと・かおる

兵庫県生まれ。1986年、東京大学法学部を卒業後、テレビ朝日に入社。アナウンサー・記者を務める。94年、休職してコロンビア大学国際公共政策大学院に留学。96年に国際関係論で修士号を取得すると、テレビ朝日を退社し、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に入所。2007年には国連UNHCR協会の事務局長に。11年、UNHCRを退所。13年から現職。21年度「日本PR大賞 パーソン・オブ・ザ・イヤー」を受賞。著書に『難民鎖国ニッポンのゆくえ』(ポプラ社)など。

調べてみると、最大で8000万人にのぼると推定されています。当時の世界人口が23億と言われているので、その3%に相当する数です。これがどれほどの惨事だったのか、最近の事例と比較したいと思います。

2023年10月にハマスとイスラエルの間で軍事衝突が起きて以降、ガザではたくさんの人々が犠牲になっています。

25年8月の時点で死者は6万2000人以上。これは、ガザの人口の3%に相当します。つまり第2次世界大戦では、ガザと同じくらいの比率と激しさで人命が、実際には戦争に加わっていない国や地

域も含めた世界全体で失われたことになります。

世界大戦の悲劇を繰り返してはならない——。この強い願いがあつて創設されたのが、国連でした。国連憲章の前文に「われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い」と記されているのは、そのためです。

1946年1月に国連総会で採択された第1号決議は、核軍縮に関するものでした。国連はその後、直接的に戦争に関わる課題にとどまらず、貧困や感染症の撲滅、民族自決や人権の推進など各分野で成果をあげています。

戦争の惨害から 将来の世代を救う

20世紀の前半に起きた2つの世界大戦を受けて、1945年10月に国連が創設されて

から今年で80年を迎えました。この節目に、どのような時代背景のもと、どんな願いを込めてできた組織なのかを振り返ることが大切だと考えます。第2次世界大戦の死者数を

ところが近年、国連を中心とする国際協調の流れに陰りが見えます。それを象徴しているのが、安全保障理事会(以下「安保理」)の状況です。先述のガザ攻撃や2022年のロシアのウクライナ侵攻など、大国の利害がぶつかり合うケースでは常任理事国が拒否権を発動し、有効な手立てを示すことができていません。国連憲章に基づく国際秩序を弱体化させるものとして、非常に懸念しています。

安保理の問題以外にも、影

響は及んでいます。核兵器不拡散条約に関して5年ごとに開かれていた運用検討会議では、15年、22年と連続して最終文書を採択できていません。また、プラスチックによる環境汚染を防ぐために新しく策定を目指している国際条約についても、目標の24年を過ぎ、今夏の会議においても合意に至りませんでした。

とはいえ、厳しい現状で大きく進展している分野もあります。23年に採択された国連公海等生物多様性(BBNJ)

協定に関して、今年6月にフランスで国連海洋会議が持たれました。同条約の発効には60カ国の批准が必要ですが、この会議をとおして多数の国々が新たに加わり、批准国は計50カ国に。さらに9月20日、61カ国の批准が集まり、来年1月17日に発効することになりました。

国連にとって難しい局面にあるからこそ、どんなふうに交渉の下地をつくり、根回しをし、実現できたのか——これらの成功体験を共有・継承

していくことが重要です。

関西万博での 国連パビリオン

4月から10月にかけて開催された大阪・関西万博には、国連もパビリオンを出展しました。国連として掲げたテーマは「人類は団結したとき最も強くなる。(United for a Better Future)」です。この「団結」という言葉には、2つの意味が込められています。国連パビリオンを運営する

にあたって、35の国連機関と15の国連事務局の部局が参加しました。大きな組織である国連としてまず団結しよう、という意味が1つ。もう1つは、世界全体としての団結です。万博のパビリオンでは、各国が自分たちの誇りとする産業や芸術を発信するのが基本ですが、そのなかで国連は、普遍性を備えた国際機関として、世界中の国々と人々に対して団結を呼びかけられる希有な存在でもあります。

来場者がパビリオンを見て回る短い時間のなかで、国連の過去・現在・未来を知り、興味を抱いてもらえるような内容を心がけました。

肥大化した組織の整理と効率化

最近の世界情勢を見ると、

自国第一主義の風潮が高まり、国際協調を疑問視する声も聞かれます。しかし、気候変動をはじめ、各国が力を合わせてルールをつくり、対応策を考えていかなければ解決できない課題は山積しています。

これだけグローバル化した社会では、ある地域の不安定化は、またたく間に他の地域にも影響します。アフリカで紛争が起きれば、中東やヨーロッパ、日本を含む東アジアにも波紋が広がる。遠いところの話だからと放っておけるものではないわけです。

「安保理が機能していない」という報道も目立ちますが、国連を構成しているのは安保理だけではありません。今年8月、万博における国連スペシャルデーの式典でアントニオ・グテレス事務総長がスピーチしたのですが、途中、

用意された原稿を離れて『アドリブ』で話し始める場面がありました。そのなかで、「安全保障理事会でなされていないこと」が注目されるあまり、「国連の他の活動や、世界を1つにしようとする私たちの努力」が見えにくくなってしまっている現状を嘆いています。

国連には主要機関として総会があり、安保理が暗礁に乗り上げた際には「平和のための結集決議」に基づいて勧告などの行動を取ることができます。また、SDGsを含む経済、文化、教育などの課題を扱う場として経済社会理事會、また国際法により紛争を解決する国際司法裁判所や、人道危機の現場で支援に当たる機関もあります。国連の役割を適切に評価するには、その全体像を把握しなければなりません。

一方で、国連の創設から80年がたった現在、加盟国は51カ国から193カ国に増え、多くの任務が国連に委ねられるに従って肥大化した組織の整理が必要なのも事実です。グテレス事務総長は今年3月、国連の改革努力として「UN80イニシアチブ」を立ち上げました。複雑になったシステムの見直しと効率化は、国連の存在意義を改めて示す上でも必須でしょう。加えて、昨年9月の未来サミットで採択された「未来のための協定」には安保理改革について緊急の必要性を指摘した事項が盛り込まれており、首脳レベルの成果文書としては初めてのことです。

国連創設100周年、さらにその先を目指して、国連改革を進め、世界各国に「団結」を呼びかけていきます。